眼下に広がる光景に、アリサは思わず息を呑んだ。
轟々と渦巻く仮想の炎。
見慣れているはずのアリサでさえ、つい一歩引いてしまうほどの巨大な炎の柱が、紫煙とともに天に向かって吹き上げられる。
しかし、それでもアリサは、その中心にいる一人の少女から、目を離すことが出来なかった。
なんて綺麗なんだろう。
普段はどちらかと言えば、かわいい、と形容されることの多いその少女に、アリサはいま眩さにも似た美しさを感じていた。
大人しい、物静か、そう言った少女の日頃の評判からは想像もつかない、全身に煌々と燃えたぎる炎を身に纏ってなお凛と立つその少女に、アリサが抱いたのは憧憬の念。
どうしたら、自分もあんな風になれるのだろう、とアリサは天を仰いだ。
自分の経験がまだ浅いことは、アリサは充分に自覚していた。
だけど、とアリサは再び視線を落とす。
もっと練習をしたら、もっと経験を積んだら、あそこまでたどり着けるのだろうか。
バトルアリーナを埋め尽くすほどの紫の爆炎、その中心に。
アリサは、自分の両手を見た。
この手から生み出される紅の炎は、あの少女まで届くのだろうか。
弱気、諦観、そんなものに心を奪われそうになり、アリサは慌てて首を振った。
あたしらしくない、と思う。
行きたい場所があるなら歩き出せ。
欲しいものがあるなら手を伸ばせ。
それがあたし、アリサ・バニングスじゃなかったか。
ふと、アリサは右手をアリーナに向かって差し出してみた。
自分のいる観覧席からアリーナの中心まで、わずか数メートル。
だが、そのあいだに立ちはだかるかのように立ちこめる炎と煙が、その距離をまるで無限のように感じさせる。
これを越えていくために、なにが必要なんだろう。
と、アリサの視点がある一点で止まった。
伸ばした手の先、そこに立つ少女の胸元に輝く真紅のパーツ。
そう言えば、似たようなものがあっちにもついていたな、とアリサは親友のアリーナでの姿を思い出す。
それも当たり前か、と思う。二人のジャケットは同じタイプをベースにしているのだ。

他のデュエリストたちに言わせるとレアものらしいのだが、まだそれほど多くはないデュエル仲間のうちの二人が使っているせいか、正直そのレアという部分についてはあまりピンときていない。

しかし実際、防御力と直進飛行性能にすぐれているというセイクリッドと呼ばれるそのジャケットは、それを纏った二人がアリーナに出てくるだけで観客から歓声があがることもあるほどなので、かなり珍しいタイプだというのは間違いないのだろう。まして、二人のジャケットはその色もレア度が高いというのだからなおさらだ。

自身のフェンサータイプのジャケットも、アリサにとってはお気に入りだった。

軽装で動きやすく、剣を振るうとき邪魔にならない。クリムゾンカラーも、炎を扱うという自分の能力に合っている思う。

ジャケットのタイプはシステムが自動で選択するそうだが、そういう意味では自分にはぴったりだ、とアリサは感心していた。

ただ、もし自分も、二人と同じ、セイクリッドのジャケットだったとしたら。

だとしたら、もう少しだけ、彼女との距離を縮めることができるだろうか。

いまは物理的には見下ろす位置、しかし実際には自分よりもはるか高い場所。

個人戦初代全国一位、現在のデュエリストたちの頂点に立つ少女。

デュエルネーム、シュテル・ザ・デストラクター。

星光の殲滅者、と呼ばれるあの少女に、少しでも、近づくことができるだろうか――

ジャケットの性能の差などを言い訳にはしたくない、とアリサは思っていた。

実際、ジャケットのタイプ自体による強弱の差は無いという話だ。

あくまでタイプによって特徴と向き不向きがあるだけであり、このジャケットは他のジャケットよりも全てにおいて性能が高いというようなことは無いらしい。

要は自身のジャケットが持つ個性をいかに生かすことができるか、それがデュエルの鍵の一つだということを、アリサはこれまでの戦いのなかで学んでいた。

だから、たとえセイクリッドのジャケットを自分が纏ったところで、それだけで強くなれるようなことは無いだろう。

そう頭では理解しているアリサだったが、心の底にもう一つ、微かにわきあがってくる感情があった。

「なのは」